

## 三好達治の詩「金星」の解釈と鑑賞の問題

宮 島 一 彦\*

合詩本「春の岬」に収められた詩集「霾」（「ばい」と音読、訓は「つちふる」「つちぐもり」）の中的一篇「金星」という三好達治の美しい詩に初めて接したのは、2年ほど前、図書館でたまたま、「現代詩鑑賞講座10—現代詩篇Ⅳ（現代の抒情）」（伊藤信吉・井上靖・野田宇太郎・村野四郎・吉田精一共編、角川書店昭和44.1.30.初版発行）を開いてみた時だった。

|                                   |   |         |
|-----------------------------------|---|---------|
| 海のやうな夕べの空に                        | } | < I >   |
| 耳鳴りほどの羽音をたてる                      |   |         |
| 金の蜜蜂……                            |   |         |
| 籐 <small>たけ</small> の向う           | } | < II >  |
| 向ひの山の                             |   |         |
| 疎林の上に休んでゐる 金星 <small>ダイナス</small> |   |         |
| やがて彼女は尾根に隠れる                      | } | < III > |
| 私は石の上に登る                          |   |         |
| しばしの間彼女は見える                       |   |         |
| やがて彼女は尾根に隠れる                      | } | < IV >  |
| 私は丘の上に立つ                          |   |         |
| しばしの間彼女は見える                       |   |         |
| 彼女は隠れる 彼女は沈む                      | } | < V >   |
| 彼女は沈む 彼女は去る                       |   |         |
| 地が歪む 山が傾く……                       |   |         |

中学の時、「しか」「揚げひばり」などの詩を教科書で読んでからこの詩人が好きだったが、この「金星」もたちまち気に入ってしまった。まだ明るい夕べの空にキラキラ光る金星を金の蜜蜂に喩え、その印象を聴覚でとらえた第< I >連（僕はある人から教えられた盲目の児童の詩「星」を思い出す：星はキラキラ光っているとみんながいう // ぼくは星を知らない // でも なんだか // 猫のなき声みたいな気がする //）。次いで自分の居る場所を明らかにすると同時に、惑星特有の瞬きしない静かな輝きが、海のように青い空に埋れているさまをうたった第< II >連。第 III、IV 連は同じ言葉の繰り返しにより、日周運動で西山のむこうに沈もうとする金星と、それを追って次第に高所へ移動する作者の、金星に対する愛惜の念を述べ、重々しい時の流れを巧みに詠み込んでいる。とうとう金星が沈んでしまってもはやそれ以上その光を追うことができなくなった時の作者の感情が第< V >連の「地が歪む、山が傾く……」という句に深く込められているようだ。——とこのように解釈した僕は、その項

\* 京都大学理学部宇宙物理学教室

の執筆者安西均の解説文は読みとばして、文末に引用してあった伊藤信吉の次のような文だけを書き写し、有頂天になって帰宅した。

ついに星の光の消えたとき、作者はなにを失ったのか。それは視野から消えた光ではない。微かな耳鳴りでもない。おそらくは作者の意識かすを流れるうつくしい時間が、いまは跡形もなく失われたのである。「地が歪む 山が傾く」と、失われた時間とほろびた光の跡に、作者の意識はよろめく。なにものかが失われ、なにものかが亡びたという愛惜の情において、この詩は夕空にかかると金星のうつくしさを歌ったのである。

それから数カ月を経て、僕は一昨年12月2日付読売新聞中学生版「学習教室—国語」に意外な記事を見つけ出した。東京のある中学校教諭の某氏の出題で、2年生用の問題に次のようにあった。

問い 1~4 (略)

問い 5 「Ⅲ」と「Ⅳ」（註。上の引用詩につけた記号）の連は「石」と「丘」の字が異なるだけでまったく同一の表現ですが、作者はそれで④作者のどんな状態と⑤金星のどんな様子を訴えているかを自由に答えてみましょう。

問い 6 (略)

問い 7 次の中から、この詩の鑑賞文として正しいと思われるものを一つ選んで答えましょう。

①「彼女」とか「見える」「隠れる」など同じ語がなんども使われ、具体的な情景の美しさとか感じた点が表現されていないので、読むのに苦勞するが、よく一行一行を味わってみるとよくわかる。三行ずつ五連にしたのもよい。

②一連、五連など表現が微妙だが、そのときの作者の感じ方が独特だからだ。二連からの視点の移動につれて見え隠れする対象のとらえ方も新鮮だ。つまり動かないものを動くようにとらえた点が巧みだ。簡潔な語調とよく合う。

最後に付された＝解答＝は、上に引用した問題についてだけ記すと、

問い 5 ④歩いて移動したこと ⑤金星が地形の変化により見え隠れする。問い 7 ②。

出題者は問い 7 の解答として、読者が②を選ぶことを要求しているのは明らかだ。しかし②の内容は僕の解釈と

全くちがう。「動かないものを動くようにとらえた」という言葉があると同時に、「視点の移動」という言葉が、僕とは全くちがった立場で使われているのである。この解釈のくいちがいには更に、問い5の解答を参照すればより明瞭となる。私は解釈について出題者に手紙で質してみたところ、ひと月ほど経って返書が届いた。それには村野四郎著「詩の鑑賞」を基底として出題したとあり、その一節が記されていた。

海のように静かに暮れていく空に、耳鳴りのようにかすかな羽音をたてているみつばちのように、きらきら空中にかがやく金星。

それは谷を越えた向い側の、まばらな林の上に、休んでいるようにじっと光っている。

それを見ながら山道を歩いていくと、ふと金星は山の頂に隠れて見えなくなる。だがわたしが、道ばたの石を越えようとして、石に上ると、ちょっとの間彼女（金星）は顔を出す。しかし、また、すぐ見えなくなるのだが、今度は山道が上りになって、わたしが高い所に立つと、また彼女は見える。しかし、それもしばしの間だ。

[B] やがてまた彼女は隠れてしまう。今度は、すっかり山陰に沈んでしまった。それほどわたしの道も深い谷間に降りて来てしまったらしい。もうすっかり、彼女は私から去ってしまった。山道はいよいよ暗く、陰しくなるやみの中で、地がゆがんで来たような気がする、両側の山が傾いてくるような気持がしてくる――。

だいたい、こういったような意味ですが、この詩のおもしろさは、つねに金星という一点に、山道のわびしさを寄せ、また、この動かないものを動くように表現することによって、山道を進む自分の状態を描き出したところにあります。

また、その切り方、調子によって、金星が見えたり隠れたりする様子を、いかにも巧みに表現したところにあります。

以上が手紙に引用されていた村野四郎の解釈である。念のため、「鑑賞現代詩Ⅲ一昭和」(村野四郎著、筑摩書房昭和41.10.20新版第1刷発行)を調べてみると、

この詩は、夕べの山路から見の金星をかき、その金星の変る状態によって、夜になる山路の情景を、それとなく表現しているのである。

云々とあって、その後に確かにほぼ[B]と同様の趣旨の文が続き、更に

また金星を「彼女」と呼んで、そうした子供らしい思いに自ら興ずる旅人の孤独な情感を、その背後にひそめているところなどもこの作品の味わいの1つであろう。

このあとは作者の当時の心境・作風について述べてある。

この解釈もちがう、と思った。それは(i)作者が山道を歩いて行きつつあることを示す語句がなく、石の上・丘の上に登るという動作以上の動的な奮闘気は詩全体からは感じられない。(ii)石を越える時に見え、下りるとかくれ、また丘に登ると見え、下りると隠れるというが、(私が)登ると(金星が)見えるという因果関係では、その原因となる作者の動作も、結果である金星の出現も共に描かれているのに、(私が)下りると(金星が)隠れるという因果関係では、結果だけが述べてあって、原因となるべき「私が下りる」という作者の動作が句として表現されておらず、不自然である。それに対して、沈みゆく金星を追って高所へと位置を変えてゆくという僕の解釈では、金星が日周運動で高度を下げるという原因の方までは述べる必要がない。“自然に”沈むという感が強いからである。特に第V連に「沈む」という表現があるのは、作者の方がその位置を下げたことによって金星が単に「隠れる」のではないことを示している。石の上→丘の上と作者の登る場所が次第に高くなることも、整った対句表現も、ランダムに起伏のある山道を歩いて行くというよりは、意識的により高い位置へと金星の光を追ったと考えるのがふさわしい。連の切れ目が「やがて彼女は尾根にかくれる」の前において、それと「私は…の上に登る」との間にあるのではないということは、隠れてからしばらく歩いて、登った時見えた、というのではなく、間髪を入れず金星を追って移動したからだと思われる。(iii)山道を下って来たがために、金星が隠れるというぐらいで「地が歪む 山が傾く…」という、心の底からしぼり出したような表現になるかどうか。もはやいかなる術をもってしてもとりかえすことができない、ほんとうに金星は沈んでしまったのだ、という感慨から生れたと考える方が自然である。村野説では、作者の描いたものは、金星の美しさというよりは、山道を旅するわびしさだから、そのような表現になるというが、「つねに金星という一点に、山道のわびしさを寄せ」たからとて、8, 11, 15 行目以外すべて金星に関する句という詩ができるだろうか。やはり金星そのものの美しさを描いたと見る方が適切である――などの点からである。

ただ、僕の解釈を積極的に証拠だてる決定的な語句も詩の中にはみつからないし、「疎林の上に休んである」という表現は村野四郎の「動かないものを動くように表現する」という解釈を支持するように見える。しかし、西空の星、あるいは太陽は、よく見ているとずんずん高度を下げてゆくように見えるが、ちょっと見ると静かに休んでいるように見える。その動きばかりでなく、金星の場合には、光そのものが静かで安らかな感じである。その2通りの見え方を共々詩中に織り込んだと考えて何の

不都合もない。しかも、山道を歩きながら見るのであれば、歩みにつれて星は動揺するし、星に対する相対的な地形はどんどん変るから、2度も続けて「尾根に隠れる」かどうかわからないし「疎林の上に休んでゐる」とはとて見えないだろう。歩きながら見れば「ふと金星は山の頂に隠れ」こともあろうが、じっと見ていれば「やがて彼女は尾根に隠れる」のである。「しばしの間彼女は見える」の次の切れ目は、じりじりと沈んでゆく時間の経過を示すのである。1カ所にたらずでじっと金星に瞳をそそぐ。金星はじりじりと尾根に沈んでゆく。石の上に登ればまだ見える。じっと見ているうちにじりじりと金星が沈む。それを追って丘に登る…。そんな情景がこの詩に最もふさわしいと思う。

出題者某氏は返書の中で、

私も天文学的な理は理として、現実に山道などで(中略)子供の頃経験したのも村野四郎氏のような解釈に立ってのもでした。(中略) 感覚的であることは理論的であることと相剋させないようにもっと配慮して私は今後指導していかなくてはいけないと考えさせたことで(あなたの手紙が)うれしかったのです。

と述べているが、そのような経験は、飛騨に父の郷里をもつ僕にも何度かある。しかし、忍びよる冷気の中で、尾根のむこうに沈みゆく宵の明星の、言葉で尽せない情趣に満ちた景観の方がより一層感動的であり、僕の記憶の中で支配的である。幼時からの思い出深い川のほとりの公園での、紫から濃紺へとたそがれる西空にぼつんと光を点じ、やがてビルのむこうに沈んでゆく金星も、それに似た感傷を僕に抱かせた。本誌の読者にもそのような経験をもつ人が多いのではないだろうか。

理屈で固った石頭で、天文学的理論をふりまわし、その枠の中で詩を鑑賞しようとするのは無粋きわまりない。しかし、自然を愛情のこもった目で細やかに鑑賞し観察する人にとっては、金星の動き(日周運動)などは目にふれる機会の多い、しかも常に印象的な光景ではないだろうか。いわんや三好達治のようなすぐれた詩人の場合である。むしろ「動かないもの」とのみ思い込んでいる方が不注意である。金星の動きに対する認識が、高度な天文学的知識を前提とするものではなく、ごく日常的なものであることはいまでもなく、また、沈む金星を動かぬとする代償に作者をして山道を歩かしめるひねった解釈より、沈む金星をありのままにとらえたとする方がよほど素直だろう。

ところで伊藤信吉の〔A〕を読みなおすと、これだけでは必ずしも氏が僕と同じ立場に立って解釈していると決めかねるので、原文を見つけて出す心がけることに

した。それは新潮文庫 364「現代詩の鑑賞一下巻」にあった。

作品にうたわれたことの意味は、あらためて解説する必要はないほどはっきりしている。暮方の空にかかり、やがて西の地平線(山の尾根の意)に消えてゆく金星の光。(中略)

疎林の上にかかっていた金星は、やがて間もなく沈みはじめる。そこで作者は尾根にかくれる星を追って、「石の上に登る」「丘の上に立つ」と、消えてゆく星に追いつがる。第三・四聯は、星の沈んでゆく時間の経過を巧みにあらわしたのであって、「やがて彼女は尾根に隠れる」という星の位置に対して、作者の方は第三聯では「私は石の上に登る」であったものが、第四聯では「私は丘の上に立つ」となる。実際には星がうごいているのに、星の位置をそのままにして、作者の位置を動かすことで、星の沈んでゆくことをあらわしたのである。第五聯になると、もう作者の位置を動かすことはできない。「彼女は隠れる」「彼女は沈む 彼女は去る」と、光——金の蜜蜂は消えてゆく。

この後に〔A〕が続くのである。やはり伊藤信吉も僕と同じ解釈である。

再び「学習教室」の問題に戻ると、詩の鑑賞が飽くまで作者のその時の立場や気持になって真意を汲みとるよう努めるべきだという方針に沿えば、出題者某氏からの返書にあるような

それは私のこれまでの教室での体験からあのへん(掲載した程度)が大多数のそれも地方も含めた中学生の最大公約数だろうと判断した

ことは出願が適正か否かとは関係がないし、もし仮に村野説が誤りだったとしたらどうなるだろう。譲って、中学生程度では自由な立場で鑑賞してよいとするならば、問題に1種類の解釈しか与えられていないのはどういうわけか。いずれにしても、問題に取組む中学生が、少しでも多くの点数をと願えば、自分の好むと好まざるとにかかわらず、予め規定された解釈に従って、制限された項目の中から解答を選ぶことを余儀なくされるような問題には、深刻な疑問を抱かざるをえない。

村野四郎の解釈も非常に興味深いと思うし、ほかにもっとちがった解釈もあるかも知れない。いずれが正しいかは既に作者がこの世にいない今では確かめようもない。しかし——こんなことを書くと、それこそ感覚と理論の相克を云々されるかも知れないが——星を愛する者の1人として、この詩が沈みゆく金星をうたったものであってほしいと願っている。